



(東京オリンピック開く 朝日新聞 昭和39年10月10日)
「空前絶後といわれるベルリン大会を百点とすれば百十点はある。」と、田畑は組織委員会の大会運営を称賛した。



東京スイミングセンターで子どもたちを励ます田畑

ちょこっと豆知識

水泳とオリンピックに生涯を捧げた英雄

田畑にとって深い思い出があるロサンゼルスで2回目のオリンピックが開催された1984年、田畑は85歳となった。病床で閉会式まで見届け、閉幕後の8月25日、水泳とオリンピックにかけた生涯に幕を閉じた。葬儀には中曽根首相をはじめ多くのスポーツ関係者が弔問に訪れた。柩はオリンピック旗で包まれ、ペートーベンの「英雄」の楽曲が流された。

田畑は東京オリンピック大会組織委員会の事務総長として、当時日本が優位に立っていた柔道と女子バレーボールをオリンピック競技に採用するよう強く訴えた。その結果、IOC委員であった嘉納治五郎が創設した柔道が正式種目となり、すべての階級でメダルを獲得。女子バレーボールも採用され、「東洋の魔女」と称された大松博文監督率いるチームは、期待通り金メダルを獲得した。一方、水泳に関しては古橋廣之進をはじめとする有力選手の引退後、世代交代

が進まず日本の競泳陣は惨敗。そこで田畑は日本水泳連盟名譽会長として、「水泳ニッポン」の再建には、選手強化に使える屋内専用プールが必要だ」と主張し、1968年に東京スイミングセンターを設立。田畑は初代会長を務めた。東京スイミングセンターは現在に至るまで、日本最高レベルのクラブとして、指導者では、競泳日本代表ヘッドコーチの平井伯昌、選手では北島康介など多数のオリンピックを輩出し続けている。



2019年大河ドラマ「いだてん」のもう一人の主人公 金栗四三(かなぐりしろう)と並ぶ姿が見られる貴重な写真。(左:田畑政治、右:金栗四三)

episode 7

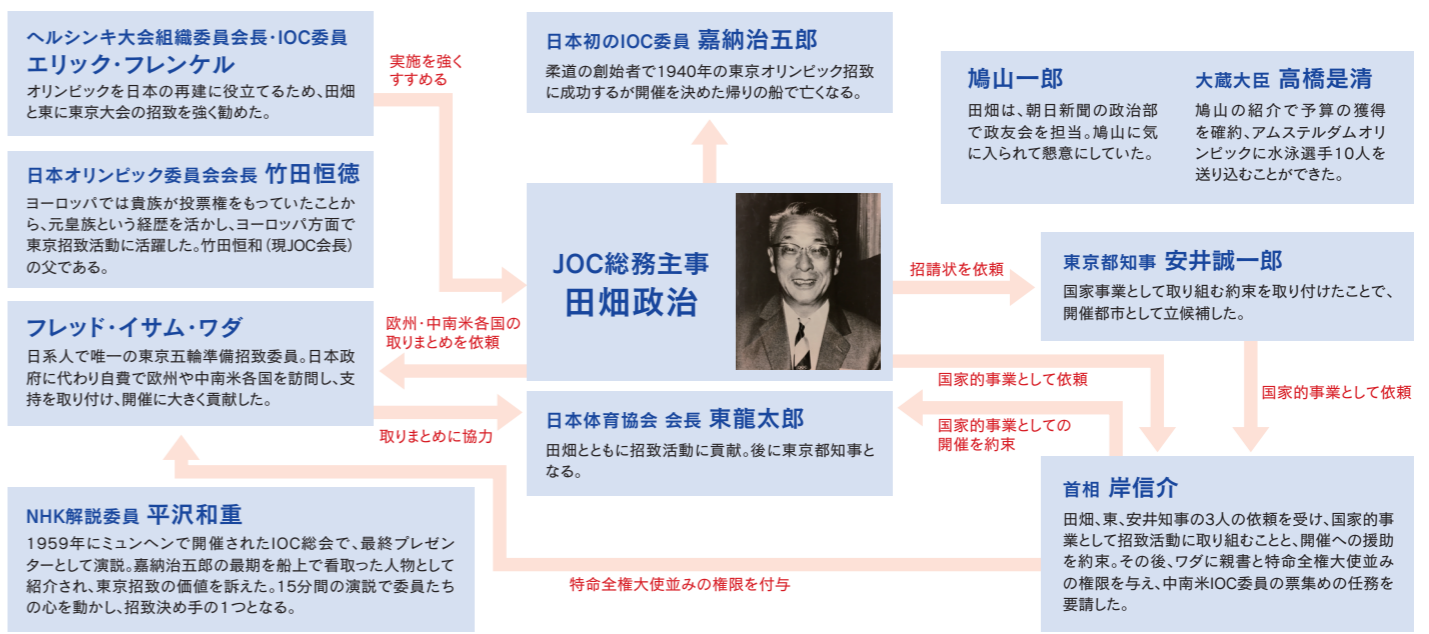
スポーツ大国を目指す



前列右側から、田畑政治、東龍太郎(日本体育協会会長、JOC委員、第4~5代都知事)、二列目左側:フレッド・イサム・ワダ、三列目中央:古橋廣之進

田畑が中心となって立てた戦略に基づき、JOC会長の竹田恒徳や織田幹雄らは世界各国を回った。1964年のオリンピック開催地として東京支持を訴えたのだ。その中でもアメリカ在住の日系人フレッド・イサム・ワダは中南米など多くの国を献身的に回り、東京開催をアピールした。そして迎えたミュンヘンでのIOC総会。開催地として立候補したのは東京、デトロイト、ウィーン、ブリュッセルの4都市。日本のプレゼンターを務めたのはNHK解説委員の平沢和重だ。田畑をはじめとする代表団一同が固唾を呑んで見守る中、45分間の持ち時間に対して原稿も見ずに15分間の演説を行った。投票した58人のうち東京が34票を占め、悲願の東京オリンピック開催が実現したのだ。

CHECK! 田畑政治を支えた、強力な支援者たち



田畑政治の経歴年表

1984年(昭和59年)	逝去
1983年(昭和58年)	日本体育協会名誉副会長
1980年(昭和55年)	昭和54年度 朝日賞受賞※長年にわたる日本水泳界への貢献とオリンピック運動推進の功績
1977年(昭和52年)	日本オリンピック委員会(JOC)名誉委員長 東京・札幌の両五輪開催に貢献したとしてIOCからオリンピック・オータダー銀章を受章
1973年(昭和48年)	日本オリンピック委員会(JOC)委員長 中国のIOC復帰に尽力
1971年(昭和46年)	日本体育協会副会長
1969年(昭和44年)	勲二等瑞宝賞※長年の水泳界への功績が認められ田畑は勲二等瑞宝章を受章
1966年(昭和41年)	ユニバーシアード東京大会組織委員会顧問 札幌オリンピック冬季大会組織委員会顧問
1965年(昭和40年)	第18回東京オリンピック開催(日本競泳のメダル獲得数・銅1)
1964年(昭和39年)	東京オリンピック選手強化特別委員会委員
1963年(昭和38年)	日本水泳連盟名譽会長
1961年(昭和36年)	第17回ローマオリンピック開催(日本競泳のメダル獲得数・銀3、銅2)
1960年(昭和35年)	東京オリンピック選手強化対策本部本部長
1959年(昭和34年)	第2回アジア競技大会選手団団長
1956年(昭和31年)	第3回アジア競技大会組織委員会事務総長
1955年(昭和30年)	第16回メルボルンオリンピック
1954年(昭和29年)	日本代表選手団団長
1952年(昭和27年)	日本代表選手団団長
1950年(昭和25年)	日本体育協会専務理事
1949年(昭和24年)	アジア競技連盟評議員
1948年(昭和23年)	第15回ヘルシンキオリンピック
1947年(昭和22年)	日本代表選手団団長
1946年(昭和21年)	日本競泳のメダル獲得数・銀3)
1945年(昭和20年)	第2回アジア競技大会選手団団長
1944年(昭和19年)	日本水泳連盟会長
1943年(昭和18年)	第14回ロンドンオリンピック開催日に日本選手権開催
1942年(昭和17年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1941年(昭和16年)	ロサンゼルス全米水上選手権大会に参加
1940年(昭和15年)	朝日新聞社常務取締役
1939年(昭和14年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1937年(昭和12年)	朝日新聞社常務取締役
1936年(昭和11年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1935年(昭和10年)	朝日新聞社常務取締役
1934年(昭和9年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1933年(昭和8年)	朝日新聞社常務取締役
1932年(昭和7年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1931年(昭和6年)	朝日新聞社常務取締役
1930年(昭和5年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1929年(昭和4年)	朝日新聞社常務取締役
1928年(昭和3年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1927年(昭和2年)	朝日新聞社常務取締役
1926年(昭和1年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰
1925年(昭和0年)	朝日新聞社常務取締役

